

東京都心部の人口減少について

玉井綾子

I 研究の目的・方法

大都市の中心部では、人口の流出が生じ、人口の空洞化が問題となっているが、東京もその例外ではない。そこで、本論文では東京の都心部を研究対象とし、特に千代田区を中心に、人口減少がどのような形で生じ、その問題点は何か、将来都心部人口はどのような変化を見せるのかを考えていく。国勢調査、各区の統計、住宅地図を使用し、聞き取りを加えて論文を進めていく。

II 研究の要旨

東京都全体の人口は、戦後増加を続けてきたが、昭和51年から55年までは減少に転じていた。これは、東京への人口の集中が沈静化し、特別区の都心区を中心にして、大きな人口減少を示したことに原因があった。その後、人口減少の幅は縮小しており、人口減少を示している区の数も減っている。しかし、千代田区を中心とする都心の各区では、現在も人口減少が生じている。

都心3区の千代田区・中央区・港区では、昭和30年代から人口減少が起こり、現在では各区で深刻な問題となっている。また、同時に昼間人口が急速な増加を示し、昼夜間人口の開きは大きい。各区とも、区営住宅の建設や再開発計画などの人口定着政策を打ち出しているが、決定的な効果をあげるような施策は行なわれていない。

千代田区を見てみると、人口減少が顕著に現われたのは、①若年層、②準世帯、③旧神田区の下町地区である。特に、旧神田区の下町地区と旧麹町区の山の手地区との違いは大きく、人口減少の多くは、下町地区で生じていると言える。また、

下町地区では昼間人口も減少している地域もあり、今まで高密度な住商混在地域であった下町地区に、変化が起きている。それと対称的に、低密度な住宅地域であった山の手地区では、地下鉄などの整備によって、事業所の増加が目立ち、夜間人口・昼間人口ともに増加している町丁目もある。

事例研究として、下町地区の人口動向と同様の動きを示す、飯田橋と、典型的な山の手地区である一番町を取り上げてみた。飯田橋では、事業所の増加にともない、15年間で人口が半減している。また、交通機関の発達により、地域の商業活動が沈滞しており、大きな問題となっている。夜間人口の増加の可能性は小さい。一方、一番町では、広い敷地を持っていた一戸建住宅の跡に、数多くの共同住宅が建設され、人口増加を示している。また、地下鉄の完成などにより、事務所ビルの建設も多く、事業所の増加が顕著で将来夜間・昼間人口共に増加する可能性を持っている。

世論調査や聞き取りによると、住民の人口問題に対する関心は以外に低く、むしろ地域の変化による環境悪化に対する関心が高かった。これは、人口減少によって、今までの過密状態が解消されたことや、教育・医療・交通などの面では不都合を感じないことが原因である。

今後も人口減少が継続すれば、区の存続が危ぶまれるが、これは単独の区の力では解決できない。人口減少の流れを逆流させることは、大変困難であり、むしろ業務地域としての整備と、昼間人口を含めた行政サービスを考えていくほうが望ましい。